

自己添削力をつける英作文指導

—英作文自己添削ソフト「作文くん」—

福嶋 雅直

0. はじめに

「英作文」には大きく2種類ある。1つは自由英作文、もう1つは和文英訳である。最近の大学入試では自由英作文問題も増えてきてはいるが、依然として和文英訳問題が主流である。本校では京都大学志望者が多いので、和文英訳問題の演習を中心に行っている。また、生徒が私のところへ持ってくる添削課題の多くが和文英訳問題である。ここでは、和文英訳問題としての英作文に絞り、私の20年近い添削経験を踏まえて、添削の問題点と新しい英作文へのアプローチを提案したい。

1. 添削の問題点

添削で特に気になるのは次の4点である。

- ①文法・語法的な間違いが多い。
- ②自分の英文を見直していない。
- ③辞書を調べればわかることを調べていない。
- ④同じ間違いを繰り返す。

文法・語法的な間違いの多くはその知識がきちんと定着していないことが原因である。従って、単に間違いを指摘して正しい表現を示すだけでは、同じ間違いを繰り返すだけで一向にこの種の間違いが減らない。文法・語法問題集に集中的に取り組んだり、パターンプラクティスのような練習を数多くこなしたりすることが必要である。私の場合、課題返却時に、関連する文法・語法問題や間違えた表現を使った類題を添付するようにしている。

同じ文法・語法的な間違いでも、3単現-s抜け、数(冠詞)抜けを含む)、代名詞などのケアレスミスは自分の英文を見直す習慣を身につければ防げるものである。私の場合、この種の間違いはチェックせずに自己責任としている。生徒同士でケアレスミスをチェックさせることも有効である。

語彙的な間違い(コロケーションの間違いを含む)も多い。日本人教師が添削で最も苦慮するのは、日

本語からの直訳と思われる表現が自然な英語として適切かどうかを判断することであろう。問題は何をもち「自然な英語」とするかである。教師でも判断がつかねるものや、ネイティブスピーカーでも人によって意見が異なるものも多い。英語が得意な生徒ならそのような表現を避けて英作文するが、添削に持ってくるレベルの生徒にそれを求めることは酷であろう。自然な英語の強制は「英作文=表現の暗記」につながり、「英作文=難しい」という意識をもたせてしまうことが少なくない。私の添削では、辞書的に明らかに間違えている場合を除いてはあまり細かくチェックしないことにしている。

添削に持ってくる生徒の意識の中には、「自分の力でどれだけ書けるかを試したい」という希望があるらしく、辞書を使わずに持ってくる者が多い。そのため、生徒の代わりに辞書を引いて訂正してあげるという作業が添削の中心となってしまうことが少なくない。もちろん、最初は辞書を使わずに英作文することは大切だが、その後で必ず辞書で確認して正しい用法を身につけさせたいものである。私の添削では、アンダーラインだけを引いておき、自分で辞書で調べさせるようにしている。

添削で一番困るのは一度にまとめて提出されることである。理想は添削を重ねるごとにレベルアップしていくことであるから、添削で指導されたことを次の課題に生かすことが大切である。中には一度に10題の添削課題を持ってくる者もいるが、たいてい10題とも同じような間違いばかりで進歩が見られない。できることなら最小の労力で最大の効果を上げたいものである。そのためにも、提出するのは毎日でもよいが一度に2、3題までとしている。

添削といえば、一般的に生徒が書いた答案の間違いをチェックする作業であろう。しかし、本来生徒が自分でやれることを教師が代わりにやってしまうと生徒の自己教育力は育たない。最終目標は、自分

で作成した答案が一般に通用するかどうかを自分で判断できる力(=「自己添削力」)を育成することである。添削指導はそのような力を身につけるための手助けをするのが主な目的であって、個々の表現を1つ1つ適切な表現に直すことではない。従って、自分で辞書を使ってよく考えればわかるようなものについてはチェックのみでコメントする必要はない。それより、自分で考えてもうまくいかない点についてアドバイスすることが大切である。

2. 英作文のプロセス

私が添削で大切にしていることは、基本的な英作文の方法が身につくように指導することである。一般的には1つの日本語に対して十人が十人とも同じ英文を想起することはあり得ないが、教育という観点からすれば、基本的な英文の書き方というものを提示し、それに沿って英作文するように指導することも必要である。そこで私は、日本語をいくつかのMSに分割して英作文するように指導している。

(1) MS とは

MS(=Minimal Sentence)とは(主語+述語)をもつ英文を構成する最小レベルの文である。

(a) The room was in a mess, and my mother told me to clean it up.

(部屋が散らかっていたので、母に掃除するように言われた。)

MS1: The room was in a mess.

MS2: My mother told me to clean up the room.

(b) I have a Chinese friend who speaks Japanese well.

(日本語を上手に話せる中国人の友達がいる。)

MS1: I have a Chinese friend.

MS2: The friend speaks Japanese well.

(c) The curtains hung in your room are beautiful.

(君の部屋にかかっているカーテンはきれいだ。)

MS1: The curtains are beautiful.

MS2: The curtains are hung in your room.

(a)~(c)はすべて2つのMSから構成されている。

(a)では接続詞 and を使って2つのMSを合成している。(b)ではMS2を関係代名詞節に変形して合成している。(c)ではMS2を分詞句に変形して合成し

ている。MSの合成方法は他にもあるし、MSが3つ以上合成された複雑な文もある。しかし、どれも単純なMSを合成したものにすぎない。言い換えれば、MSを生成してそれらを合成しさえすれば、どんな文でも作ることができるのである。

(2) MS の生成

MSの生成手順は次のとおりである。

①核になる表現を見つける。

②主語を決定する。

③Frameを確認する。

④Frameに基づいてMSを生成する。

まず、日本語の中でMSの核になる表現を見つける。MSの核になるのは、動詞や(be動詞+名詞・形容詞)である。(b)なら「話す」と「いる」、(c)なら「かかっている」と「きれいだ」がそれに当たる。核になる表現(V)が決まったら、それに対する主語(S)を決定する。

次に、核になる表現が一般動詞の場合はFrameを確認する。Frameとはどのように語句を配列するかという文の枠組みであり、動詞の意味によって決まっている。「X(人)にvするように言う」という意味では、tellは(tell X to v~)というFrameをとる。あとはFrameに合うように表現を当てはめるだけでMSを生成することができる。

(3) MS の生成(Generation)と配列(Design)

自然な日本語を英文に直す場合、核になる表現を見つけにくいことが多い。また、MSを単純に合成するだけでは意図が十分伝わらない英文となることがある。ここでは、いくつかの例を挙げてMSの生成と合成による英作文のプロセスを紹介しよう。

(a) 教育は子どもの自主性を育むべきだ。

【Generation】

MS1: 教育⇒教育する: educate X

We educate children.

MS2: 自主性⇒自分で学ぶ: learn by oneself

Children learn by themselves.

↓育む⇒手助けする: help X v~

We help children learn by themselves.

【Design】

① MS1 and MS2.

② When MS1, MS2.

【Answer】

① We should educate children and help

them learn by themselves.

- ① We should educate children to learn by themselves.
 ② When we educate children, we should help them learn by themselves.

この問題では、「自主性」や「育む」という表現が思いつかないために挫折した生徒が多かった。しかし、このように動詞表現になるように和文和訳することで、MSを生成して事態を打開することができる。MSを生成できればそれらを合成するだけであるが、どのように合成するかはさまざまである。MSの合成段階でその方法を検討する設計図にあたるのが配列(Design)である。最も単純なのは①のように等位接続詞 and や but を用いた合成である。①は①による合成を発展させたものである。②は従位接続詞 when を用いて合成したものである。また、文意に直接影響しない should のようなニュアンスを付加する表現は、合成段階で加えたほうが英作文しやすい。

(b) 窓の外を見ると人が歩いているのが見えた。

【Generation】

MS1: 見る: look

I looked out of the window.

MS2: 歩く: walk

People walked.

↓見える: see X v ~

I saw people walk.

【Design】

When MS1, MS2(walk: 進行形).

【Answer】

When I looked out of the window, I saw people walking.

「歩いているのが見えた」のように核になる表現が重なるときは、まず先の表現を核にしてMSを生成し、それに後の表現を加えてMSを生成すればよい。問題は時制の処理である。解答で示したように、walk は walking と進行形にすべきである。しかし、MSの生成段階では、walk とすべきなのか walking とすべきなのかは判断ができない。合成段階で文章全体の状況や筆者の意図を考えて初めて決定されるものである。このように、進行形[相]や完了形[相]といった相(Aspect)は、あくまで書き手がその事象をどのようにとらえているかを示すもの

なので、合成段階で考えるべきであり、生成段階では現在形・過去形・未来形という大きな時制だけを考えればよい。

(c) 人間は今まで森林と調和を保って暮らしてきたが、今や状況は急速に変わりつつある。

【Generation】

MS1: 暮らす: live

Human beings lived in harmony with the forests.

MS2: 変わる: change

The situation changes rapidly.

【Design】

Until now MS1(現在完了形), but now MS2(現在進行形).

【Answer】

Until now human beings have lived in harmony with the forests, but now the situation is changing rapidly.

時を表す語句は相にまで影響を及ぼすものも少なくないので、基本的には合成段階で加えたほうがよい。時を表す語句は文末に置くのが普通だが、この文では「今まで」と「今」の状況を比較しようとしているので、時を表す語句は文頭に出すべきである。このような語順への配慮が長文和文英訳問題では欠かせないが、多くの生徒は1文1文を英作文することに意識が集中して、文脈にまで配慮する余裕がない。そのためにも、MSの生成段階と合成段階を分けて英作文することで、時制や語順に配慮した英作文ができるようになる。指導においても、段階を分けることで、生徒がどの点に注意して次に英作文をすればよいのが明確になる。

3. 英作文自己添削ソフト「作文くん」

「英作文は自分ではなかなか勉強できない」と言う生徒が多い。そのため英作文の学習といえば、模範解答やそこに使われている表現を覚えることや、教師や通信添削による添削指導が中心であった。添削は教師にとって負担が大きいが、「生徒のため」と時間を割いて添削している先生方も多いことだろう。そこで私が開発したのが英作文自己添削ソフト「作文くん」である。これは和文英訳問題を自動的に添削しながら英作文演習をするためのソフトである。従来の英作文ソフトの大部分は模範解答が1つ

しかないが、「作文くん」では模範解答のバリエーションが豊富で、かつ学習者が書いた英文をもとに模範解答を作成するので、模範解答は必ず学習者が書いた英文に最も近いものになる。従って、より正確に英文を添削することができる。また、段階を追ってヒントを提示するので、教師がそばにいるような感覚で学習を進めることができる。「作文くん」の最大の特徴は、京都大学に代表される長文和文英訳問題に対応している点である。以下に「作文くん」の主な特徴をまとめておく。

①学習者の多様な解答に対応。

複数の模範解答の中から学習者が書いた英文に最も近いものを自動的に選択して提示する。

②簡単操作でスピーディーに学習。

ボタンの数を極力減らすことで、英語学習そのものに集中することができる。

③圧倒的な添削精度を実現。

単語レベルで訂正箇所を指摘し、合格答案へのヒントを提示する。

④充実したヒントで正解までしっかりアシスト。

Words & Phrases, 用例, 難しい表現など、きめこまやかなヒントを段階を追って提示する。

⑤2文以上から成る長文和文英訳問題に対応。

英作文のプロセスをMSの生成段階と合成段階に分けることで実現している。

では、例題を使って「作文くん」による添削のプロセスを説明しよう。

人の数より車道のほうが多い町なら運転しやすいと思うのは大間違いだ。なるほど、この町では車で動くのは簡単だが、行きたいところには決してたどりつけない。

この文章では次の4つのMSを生成する。

MS1: 人の数より車道のほうが多い。

MS2: 運転しやすい。

MS3: この町では車で動くのは簡単だ。

MS4: 行きたいところには決してたどりつけない。

「作文くん」はMS1に対して次の解答を用意する。

(a) There are more roads [streets] than people.

(b) The number of roads [streets] is larger than that of people.

英文としては2文であるが、roadsをstreetsに

置き換えれば、模範解答としては4文になる。

まず、時制、複数形・単数形、比較級などの語形レベルのミスをチェックし、間違いがあればその時点で次のようなフィードバックをする。

The number of road is more than people.

↓フィードバック

The number of road ▲is more than people.

次に、文法・語法・意味上の間違いをチェックし、間違いがあれば次のようなフィードバックをする。

The number of roads is more than people.

↓フィードバック

The number of roads is more than people.

※1 下線部をlargerに換える。

※2 後半部分にthat ofを補う。

※の部分提示されるヒントである。自分で間違いに気づいて、できるだけ自分の力で最後まで答案を書くように設計している。また、ヒントウィンドウを開けば、そのMSの類例や簡易の文法解説を読むことができる。

MSの生成がすべて終了すると画面が変わり、これまでに自分が生成したMSが提示される。これをもとにMSを合成し、答案を作成する。

答案を作成し終わると最終画面が表示され、答案と模範解答が並べて表示される。模範解答は学習者が作成した答案をもとにして作成されているので、模範解答と違って部分部分が明確になり、どこが間違っているのかがすぐにわかる。私の添削では、最終画面をそのまま印字して提出させることにしている。こうして提出された生徒の答案は、従来のような生成段階での文法・語法・意味上の間違いがなく、合成段階での間違いに絞って指導することができるので、負担も少なく効果的な指導が行える。

英作文自己添削ソフト「作文くん」は筆者ホームページ (<http://www.sakubun-kun.com>) よりダウンロード可能なので、是非ご使用いただき、忌憚のないご意見やご助言をいただければ幸いです。

(西大和学園高等学校教諭)